力を張り、此の期を通じて殆んど百年の間、塞北諸部の間に覇を稱へ、唐に對しては絶えず强き壓迫を加へたり、唯だ其の末期に至りては、勢漸く衰へ、殊に昭禮可汗以後は殆んど混亂の狀態に陷り、大に其の勢を失ひ、遂に外難を招くに至りしと雖、然も尙其の根據地に止りて、重きを諸部の間に占めたるものなりとす、されば此の時期は實に回鶻の隆昌時代に屬す、第三期に至りては、漠北の根據地を保つ能はずして四散し、一部は滅亡し、一部は更に勢力を養ひて、後の發展を準備したる時代にして、曰ふ迄もなく衰退時代に屬す。

偖て此の研究に就きては、兩唐書の回鶻傳を主なる據とし、之を補足し訂正するに今日余輩が手にし得る東西各種の史料を以てせり、然れども此等の史料は多くは回鶻傳所載の事實に就きて、其の當否を判定せしむる材料たるに過ぎずして、傳の記載以外の新事實に及べるものは甚だ稀なり、されば此の點より見て之を兩唐書回鶻傳の研究と稱するも可なり、抑も兩唐書に載せたる回鶻傳は、種々の點に於て多くの誤謬と不備とを有するものにして、到底其の儘に準據し得べきに非ず、然るに之に關する研究は從來極めて閑却せられ、學者の之に着手したるもの殆んど無く、僅に Chavannes 氏が舊唐書の一部、裴羅の立つに至る迄の記事を譯述し、之に底註を加へたるものあれど、之とて深く本文を批判し、其の正否を究めたるには非ず、古くは Klaproth 氏、降りては Bretschneider 氏、更に近くは Schlegel, Marquart 氏等を始め、其の他の學者にして回鶻の歷史の研究に指を染めたるものは皆此の回鶻傳、若しくは之を採錄したる書、假令ば圖書集成邊裔典回紇部彙考の文面の如きに就かざるものあらざれ共、此等の諸氏は殆んど全く原文に批判を加ふることを試みず、すべての記事を正確と認めて其の所論中に引用したるに止まれり、殊に Schlegel 氏が Kara Balgassun の回鶻碑文考〔一〕に前附して回鶻史〔二〕の年代要略を載せたる以來、現